

# 尚志高等学校

## 福島県郡山市

平成 24 年 1 月 27 日

調査員 大森 原 澤村（記録） 鈴木（私学新聞）  
学校側 校長 倉又晴男 副校長 樋口康男

### I 調査趣旨説明 大森

### II 学校側説明・質疑応答

#### 1. 地震による被害

- ・地震による被害が大きく、規模は仙台市周辺より甚大
- ・震災から 10 ヶ月で、事業を再開したところもあるが、まだ手つかずのところも多い
- ・学校の被害：5. 校舎の復旧の項参照
- ・生徒宅の被害 60 件：全壊 5 件 半壊 55 件

#### 2. 放射線への関心が高い

- ・原子炉爆発当時の風向きや雨による傾きがある
- ・大気中の放射線量は減じたが、その分はどこへ行ったのか
- ・先が見えない将来的な心配
- ・郡山市周辺は基準値より遙かに低いですが、数値がどの程度であれば絶対に安全だという経験値がない
- ・特に、幼い子供への影響が案じられる
- ・本学園には 2 つの幼稚園があるが、保護者の放射線に対する関心が高い  
屋外活動が出来ない状態  
一時避難および県外移転が 400 人中 50 人出ている（2 幼稚園合計）
- ・若い人ほど県外に移動し、本校教員の中にも妻子は新潟に移転という事例がある
- ・本校の生徒についてみると、転学者が 6 人（在籍者数約 1100 人）、入学辞退者が 2 人出ている

理由は、放射線に関するもの

#### 3. 当日の状況

- ・午前中授業で、特進組とクラブ活動で約 400 人が在籍していた

#### 14:46

- ・激しい揺れが長く続く
- ・揺れが収まってから緊急避難放送を入れる 電気は止まっていなかった
- ・この放送の前に、教室ごとに教員の誘導で避難が開始されていた
- ・避難場所が 2 カ所に分かれてしまった

特進組は教室から第1グラウンドに

クラブ活動組は体育館やグラウンドから第2に

- ・このため、その後の全体把握に手間取った
  - \*この事柄を反省点とし、今後の対策としてトランシーバーの設置を実施した
- ・引き続き起こる余震のため、グラウンド待機が長引く
- ・ジャージ1枚の生徒も多数いたため寒さ対策が必要に

15:30頃

- ・スクールバス4台に400人を収容し、寒さを避ける

17:30頃から

- ・鉄道は完全に止まる
- ・電気は止まらなかったが、道路の信号は停止し激しい交通渋滞
- ・家庭との連絡を取り始める 電話はたまに通じる程度
- ・家庭からの問い合わせも入り始める
- ・保護者の迎えを受け、順次下校を開始
  - \*帰宅困難生徒の寮での宿泊も考え、準備を始めた

19:30頃

- ・最終の引き取りがあり、全員無事に下校を完了

#### 4. その後の対応

- ・3月12日以降を休校に
  - テレビのテロップ、ラジオの放送で通知
  - ホームページにもその旨を提示
- ・寮生100人の帰宅
  - 水や食料の問題でなく、放射線の問題を保護者が心配
  - 14日 スクールバスで送り届ける
  - 15日 午前2時に全員を自宅へ届け終える
- ・教職員も家族の元へ
  - いわき市の出入り業者から原発事故の情報が入り、教職員の間にも動揺が
  - 14日は臨時休暇とし、家庭への対応に専念するように
  - 15日以降は出勤できる教職員は出勤するよう要請：校舎内の整理
- ・始業式、入学式の日程変更
  - 始業式：予定4月9日 実施4月15日
  - 入学式：予定4月10日 実施4月16日
  - JRの復旧見込み（完全復旧は16日 水郡線はまだ不通）とバスの運行
  - 新入生については、在校生の通学区域の安全確認を元に
  - 在校生、新入生ともに平常に出席できた
  - 夏休みの短縮措置

#### 5. 校舎の復旧

・被害の状況

校地の一部に液状化や地盤沈下があり段差や校舎の傾きが生じた  
1棟7教室が使用不可能に  
使用してない木造校舎を利用、教室移動が大変に  
復旧には2ヶ月かかる  
安全対策としての修復を優先する  
配管の破損  
水浸しになる上、破損箇所の発見が困難 復旧は秋になる  
保障の方針は出たが、やはり学校負担が重い

6. 除染

- ・ 5、6月は教職員がこの件に集中
- ・ 以後は業者に依頼  
その労力と費用は膨大で、今後のことは計り知れない

7. 進路

- ・ 就職の内定取り消し 5件 地元企業から
- ・ 7月1日で全員就職決定

8. ボランティア

- ・ 吹奏楽部がクラブ活動の延長として演奏会を開催  
自治体に要請を受け、学校として
- ・ その他のクラブで、避難所の荷物運搬等を行う
- ・ 個人での参加もあっている  
小さい子の面倒を見る  
応援団やクラブ（よさこい部、茶道部など）が避難所で慰問活動

9. 生徒募集への影響

- ・ 県立高の入試方法や結果次第の部分が多く、数字的な予測が出来ないのが現状
- ・ 被害家庭の生徒には、入学金や授業料の免除  
郡山市の私立学校共通の対応

10. 心のケア

- ・ カウンセラーが常駐している
- ・ 夜眠れない、学習に集中出来ないなどの訴えが出ている
- ・ しっかり見守っていきたい

11. その他

- ・ 住民の避難所にはならなかった
- ・ 全校大会でのサッカー部の活躍  
福島気持ちを背負っていたと思う  
選手は結束し、チームとしての団結があった

# 福島東陵高等学校

橘浩二郎校長先生を初め、小原敏副校長、齋藤光志教頭、佐藤俊市事務長が対応してくれた。あらかじめ当研究所の「震災時における学校対応の在り方に関する調査研究」の質問項目に沿った形で項目ごとにプリント（別紙資料 1 および 2 参照）にまとめ分担して話して頂いていたおかげで、スムーズに聞き取りを進めることができた。必要に応じて、日本私学教育研究所の専任研究委員の大森、調査委員の沢村、原が随時質問をする形で進められた。

以下、主には資料 1 を参照いただくとして、資料の補足や資料にないことなどを中心に報告する。

## 【資料 1】の質問項目

1. 3月11日金曜の当日、被災地にある各私立学校の校長等はどのような対応を行ったのか。
2. 当日、教職員はどのような対応を行ったのか。
3. 避難所としての学校（私立学校）は、どのような役割や機能を果たしたのか。
4. 震災直後における対応や震災後3ヶ月経過した段階など、各時期においてどのような状況にあり、どのような対応に追われたのか。
5. 卒業・入学の時期、どのような対応をしたのか。
6. 4月からの学校再開に向けて、どのような対応を行ったのか。
7. 被災した児童・生徒に対して、どのような手当を行ったのか。
8. 児童、生徒の心のケアは、どのように行っているのか。
9. 被災した教職員にどのように対応したのか。
10. 学校の復興支援は、どのように展開すれば良いのか。
11. 校舎等の被害と学校復旧に向けて、どのように対応したか。その対策は。
12. ボランティア等外部機関の活動は、学校に対してどのような事をしたのか。今後、学校として望むことは何か。
13. 短期的、中期的、長期的に、どのような対策や支援を行うべきなのか。
14. 今後の地震対策として、どのような予防的措置を講じておくべきなのか。
15. 関東地区においても帰宅困難な児童生徒が多数出たが、どのように対応したか。今後の対策の在り方について検討する。
16. 公立学校の調査と本調査の比較検討による学校防災安全対策の検討および考察  
これらの課題を詳細に調査研究することにより、今後、私立学校が地震災害に対して、どのように対応し手当していくのかの資料とする。

## 1. 震災当日について(資料1 調査項目1～3)

震災当時、在校生徒が200名ほどであったため、生徒の掌握は比較的スムーズに行った。補習中の生徒5～60名は担当教員が、またグラウンドや体育館で部活中であった生徒はクラブ顧問が誘導した。校舎は円形校舎四階講堂のガラス窓が200枚割れるなど被害は大きかったが、幸い生徒にけが人はいなかった。

生徒は自転車通学(自宅からと駅からとで)が6割ほど、その他徒歩、バス通学である。生徒の安全確認後、通学路をどう確保し、生徒を安全に帰すことができるかが課題であった。当時電気が止まり、信号もついていなかった。保護者との連絡はたいへんだったが、携帯やメールで何とかとれた。最終的に連絡がとれなかったり、迎えが来ない生徒は5～6名だったが、教職員が手分けして送り届けた。二本松の生徒は教頭が送っていったが、4号線が大渋滞で、2時間以上かかった。午後8時に全員が学校を出たが、これは校長判断である、「片付けは今日はしなくてよろしい。それより自宅も被災しているだろうから、家族の安否確認や自宅の復旧に専念せよ」との指示を出した。

避難所として体育館使用の依頼は、県や町内会からあったが、安全を確保する見通しが立たないことからお断りした。避難所となった公立校の話では、まるで野戦病院のような状況であったという。

## 2. 震災後から学校再開までの対応(資料1 調査項目4～6)

2次募集の入学試験は、1週間遅れて実施したが、テレビのテロップで流してもらったり、新聞に載せてもらうことで周知した。

3月29日の終業式には大多数の生徒が登校したが、交通機関の関係で一部来れなかった。

4月10日頃から電車が開通するとの報道から、始業式・入学式を予定通り実施したが、その後も余震が続き、電車のダイヤも遅れがちなことから、連休前までは短縮授業とした。授業の遅れは、夏休みを遅らせて取り戻した。

## 3. 深刻な原発事故の影響(資料1 調査項目4、10、11および資料2)

福島が、同じ被災した宮城や岩手とも意識が異なることに、原発事故がある。

3月14日の水素爆発で大量の放射性物質がまき散らされた。本校の裏にある信夫山にも、降り注いだようである。政府の情報は後出しで、当時はなにも知らされず、対処できなかった。生徒の健康と安全を守るために、県内でいち早く6月に除染に取り組んだ。線量の高い校庭の表土を取り除き校庭の裏側に埋めた。当初は教職員がカップやゴーグルをして作業した。12月にも業者に依頼し側溝などの汚泥除去などをした。この結果2.25マイクロシーベルトあったのをいったん0.64まで下げたが、要請(資料2)を出した時点で0.69、今日の時点では0.78マイクロシーベルト、空中では1.1マイクロシーベルトと、また徐々に高くなってきている。これは信夫山(2.46マイクロシーベルト)など標高の高い

ところから雨や風によって放射性物質が低い方に流出してきていることが考えられる。山自体の除染はとても不可能だから、せめてこれを遮断する防護壁とその手前に側溝をつくるのが喫緊の課題だと考えるが、莫大な費用がかかる。公的援助要請を行っているところである。

ボランティアでグリーンピースからウクライナやギリシアの研究者がやってきて放射線量の測定を実施してくれた。一時的疎開をした方がよいとも言われた。

学校では、放射線計量機や高圧洗浄機を購入し、測定や除去に努めている。教職員には貸し出しをして、自宅でも活用してもらっている。現在、校長が率先して放射線量の測定を行っている。この学校は高台にあるが、下のバス停付近はここより線量が高い。

低線量を長期間被曝した時どうなるか、データがない。専門家も意見が分かれている。福島の第一原発はいまも以前ほどではないが毎日放射能を出し続けている。危険性を知っている医師は真っ先に県外に去ったという。私（校長）も「家庭優先で(学校を)やめてもよい」と教職員に言った。外国人講師はすぐ帰った。結婚したての若い教員が1名辞めた。家族を避難させて単身で勤務している教員も6名いる。幸い多くの教員が踏みとどまってくれている。生徒の作文に「私たちは結婚できないのか」「子どもが産めないのか」とあって涙が出た。

校舎の壊れた箇所は修復できるが、放射能汚染はいつ収束するか、先が見えない。結局生徒自身が放射線について正確な知識を持ち、自衛するしかない。教職員も同様で、生徒向けには出前授業など、教職員には校内講習会などで、知識を共有するようにしている。



左から橘校長・小原副校長・齋藤教頭の各先生

以上

# 帝京安積高等学校

日 時 平成24年1月26日(木) 14時00分～16時00分

場 所 福島県郡山市安積町日出山字神明下43

調査担当 山路 進 日本私学教育研究所主任研究員  
大森隆實 日本私学教育研究所専任研究員  
沢村興平 日本私学教育研究所研究調査員  
原 芳典 日本私学教育研究所研究調査員  
鈴木邦雄 全私学新聞編集長 研究調査員

## 調査内容 1. 震災当日の様子について

穂積良一校長先生、教頭先生から説明を聞く。校長先生は仙台での会議に参加のため出張していたため、教頭が中心になって震災の対応に当たった。この日は学年末テストの返却日だったので生徒は午前中に概ね下校していた。また、次年度に入学予定生の保護者に対しての説明会も午後2時には終了していたので、校内に残っていたのは部活等の生徒50名程度であった。

地震発生時の校舎はよれるような状況で、窓ガラスは次々に割れ校内にいられる状態ではなかった。また、学校が川の支流の近くにあったため、校庭3箇所から液状化による水が吹き上がった。そのような状況の中、生徒を校庭に集め地震が落ち着くまで待機させた。

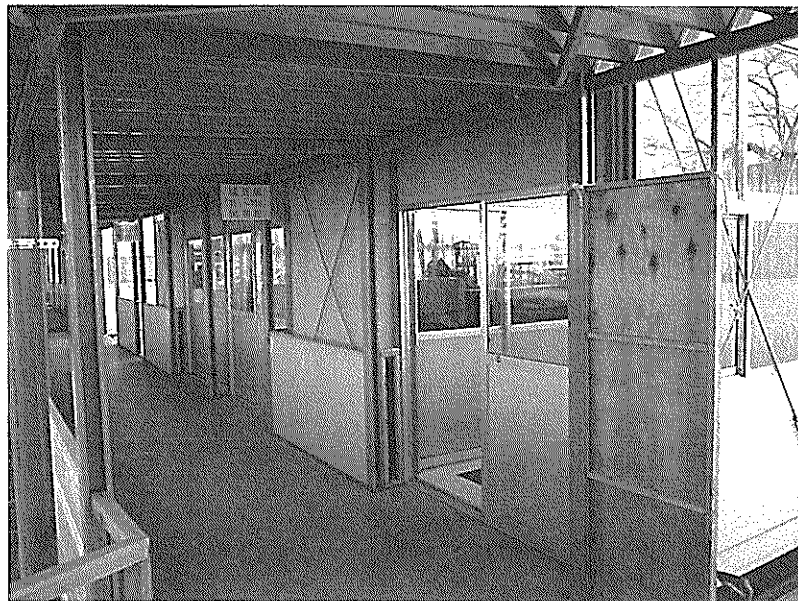
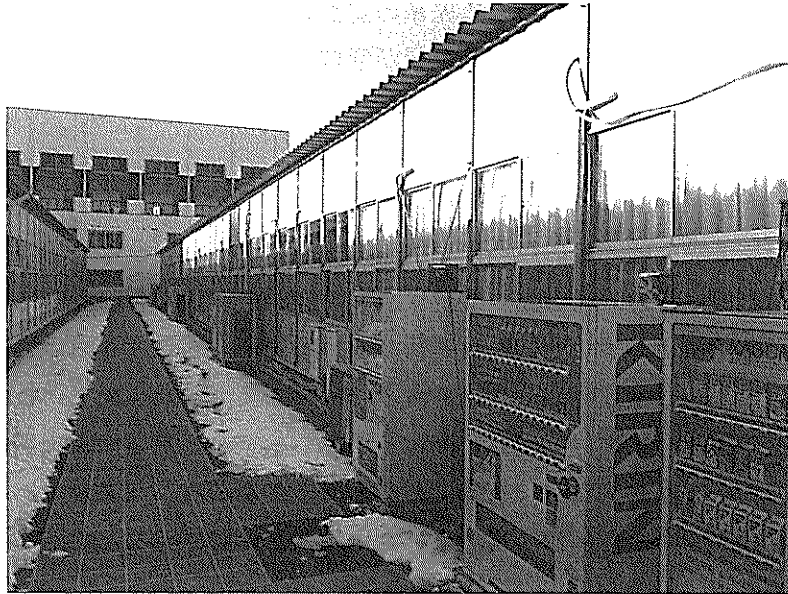
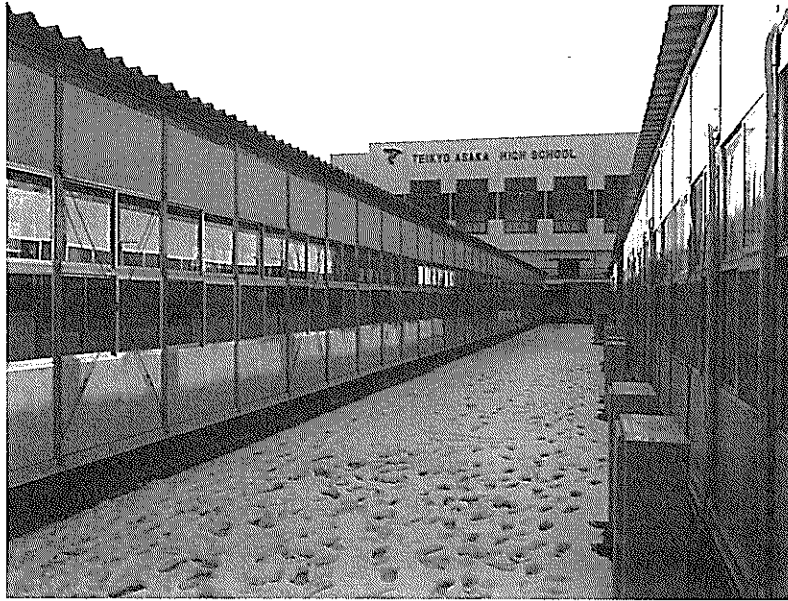
校舎内に居た生徒、教職員については全員無事であった。当日は入学手続き日であったが来校していた保護者にも怪我等はなかった。

余震は続いていたが、帰宅できる生徒は帰らせ、他のものは交通手段がないため保護者が迎えに来るのを待った。教員は全員の安否が確認されるまで待機した。確認終了は午後8時だった。

## 2. 震災後の対応

校舎は体育館も含めて使用できないほどの破損状態だったので、まず、調査してもらう必要が求められたが、県内、市内には役所をはじめ、公共の建物が被害を受けている状況で、それができるひとは誰もいなかった。そのような折、帝京グループのほうから10名の専門家によって調査、プレハブの建築と手配してもらい、5月の連休明けから授業を再開できた。

震災によって転出、入学辞退者は皆無であった。教員の中では2名実家に戻ったものがあつた。その後の原発事故の影響と関係があつたと思われる。また、震災によって進路を変更した生徒も多少あつた。これからは校舎の立替による経費の問題、セシウム等の土壌の除去などの課題を抱え、難しい運営が求められている。(文責 大森)





# カリタス小学校における震災対応について

財団法人日本私学教育研究所

専任研究員 大森 隆實

## 1. 震災当日の対応

首都圏にある私立の小学校においては、この時期は短縮授業をしており、カリタス小学校でも、児童の下校が終わったあとであった。学校の最寄り駅である JR 南武線の中野島駅、登戸駅に教員を走らせ JR、小田急線の不通により帰宅できない児童の対応をした。その結果 2 名の児童を保護し学校に連れ戻した。

4 時 30 分に学校から緊急連絡網を使って児童の安否確認を行ったが、全児童の最終確認ができたのは翌朝の 7 時だった。というわけで 7 名の教職員が学校に残り家庭との対応を行った。

## 2. 震災に対してのマニュアル見直し

児童の安全を第一に余震の続くこの時期に卒業式は実施しないということになり、併せて学園全体で防災の委員会を立ち上げ、精力的に議論した。今回の災害が小学校においては児童下校後、中高には全校生徒が校内にいる状況ということで、災害時における対応の難しさを目の当たりにした。

また、児童引き渡しカードの見直しや、武蔵溝ノ口の田園都市線乗換駅で立ち往生した児童への対策で他の私立小学校との災害時における協定に向けての話し合いなど課題が沢山浮かび上がってきた。備蓄についても数千万円の予算が生じてくるので、その対応にも苦慮したようである。その結果、寝袋は個人持ちとし、小学校入学時から高校卒業時まで常に教室に保管することとするなどの、考え方が一致し緊急の対応ができた、と、話されていた。

災害時における避難カード、等別紙参照ください。

## 防災体制の整備状況について

2011.10.8  
カリタス小学校

- 1 ヘルメットの購入  
折りたたみ式ヘルメット 小学校全児童分 防災頭巾は取りやめ
- 2 シュラフの購入 幼稚園、小学校、中高の全員と教師全員分  
※コールマン スリーシーズン用
- 3 非常用電源の設置 小学校 停電時に上水道とトイレの水に対応  
※軽油にて稼働
- 4 食料と水の購入 幼稚園、小学校、中高の全員と教師全員分  
※既存の3日分のキットに加えてアルファ米一人3袋、5年保存水一人2ℓを追加購入
- 5 LED電灯と手回し式ラジオ、対応する乾電池等の購入  
※84個 幼稚園、小学校、中高の全部
- 6 高性能無線機の購入 小学校のみ 登下校時の震災に対応  
※5台 近隣駅に教員を派遣。携帯不通時に、児童の安全を確認
- 7 防災用大釜と薪の購入 幼稚園、小学校、中高の全部
- 8 防災用倉庫の設置、収納場所の改修工事  
幼稚園、小学校、中高の全部
- 9 緊急地震速報の受信体制の確立  
幼稚園、小学校、中高の全部
- 10 防災組織の確立  
児童在校時の対応を中心に分掌と計画表等の作成。  
※登下校時の対応 休校日の対応 近隣住民への対応（課題）
- 11 登下校途中における大地震への個々の対応  
通学途上における避難場所、帰宅支援ステーションを確認し、避難方法を記したカードを児童が常時携帯する。  
小学校
- 12 園児、児童、生徒の保護者による引き取り体制について検討する。

【ライティング種類】・・・2011年 新規購入分

購入数	8	3	23	20	30
名称	レスキューライトⅢ	蛍光灯付強カライト	QUAD LED LANTERN	MICROパッカー LANTERN	3LEDヘッドランプ
社名	株式会社 永光	Panasonic	Coleman	Coleman	旭電機化成株式会社
品番	ZA0229-2	BF-664F	170-9374	170-9443	ACA-4302
光源	白色 (LED)	白色 (蛍光灯)	白色 (LED)	白色 (LED)	
光量	表示なし	蛍光灯800ルクス (蛍光灯部:約240ルーメン相当)	379ルーメン	14ルーメン	
	手動充電式・ラジオ・ライト・サイレン・ 携帯充電・太陽光充電	トーチと蛍光灯2種類	内蔵バッテリーで充電後、 4分割して使用可能		
					
電池	単3=3本 手回し充電式/両方利用可	単1 = 6本	単1 = 8本	単3 = 3本	単4 = 3本
電池寿命	表記無し	(蛍光灯) 連続14時間	(LED) 連続75時間 (分割時: 約 2.5時間)	(LED) 連続100時間	(LED) 連続30~90時間

定価	¥6,000	¥5,775	¥8,820	¥1,890	¥2,000
購入価格	¥2,300	¥4,977	¥6,300	¥1,350	¥1,300
購入業者	一幸堂	三越	Coleman	Coleman	一幸堂

種類	単1				単2				単3				単4			
	現行在庫数	新規取扱数	注文数	小計	現行在庫数	新規取扱数	注文数	小計	現行在庫数	新規取扱数	Total	小計	現行在庫数	新規取扱数	Total	小計
¥92,640 小学校	192	202	400	¥68,000	0	0	0	¥0	76	84	160	¥12,320	70	90	160	¥12,320

## 災害時における避難カード：原本

01	02	03	氏名	
04	05	06	おだきゆうせん・なんぶせん・し市バス・とほ 小田急線・南武線・市バス・徒歩	
住所				
<p>① <small>つうがくろ</small>の途中<small>とちゆう</small>で大地震<small>おおじしん</small>が発生<small>はつせい</small>したとき、途中<small>とちゆう</small>で避難<small>ひなん</small>できる場所<small>ばしよ</small>。 (待ち合わせ場所)</p> <p><small>じたく</small> <b>自宅</b> →</p>				
<p>② <small>つうがくろじよう</small>上(もしくは<small>つうがくろふきん</small>通学路付近)で、一時預かり<small>いちじあず</small>を依頼<small>いらい</small>できる場所<small>ばしよ</small>。 (カリタス小学校の児童<small>こども</small>の家は除く)</p>				
<p>③ <small>じようきがい</small>上記以外で、登下校中<small>とうげこうちゆう</small>に被災<small>ひさい</small>した場合<small>ばあい</small>のご家族<small>かぞく</small>での約束<small>やくそく</small>。</p>				

◆このカードは、いつも学校がっこうにもってきましょう。

## 国立音楽大学附属小学校

財団法人日本私学教育研究所  
専任研究員 大森 隆實

### はじめに

校長が新潟地震を体験していたので、地震発生と同時に交通網が機能しなくなると予見し、まずは下校途中の子どもたちの安全確保を最優先に対応した、ということを開かされた。

当日は全児童が登校する日であったため、下校した3年生以下と、校内で活動していた4年生以上と二組の対応にせまられた。

#### (1) 3年生以下の児童への対応

途中の児童の安全確認を最優先にして校長、教頭、事務長で協議し毎日児童が利用している、JRの国立、矢川、谷保の各駅に学級担任以外の先生を向かわせホームまで入って児童を学校に連れ戻した。すでに、自宅に戻った児童もおり、学校に戻った児童は40名だった。

トイレや水飲みの場所、安全できる場所など確保することが低学年の児童には大変困難だったようである。日頃から方面別に下校指導をしていたおかげで3年生が進んで1、2年生の面倒をみ、最終の安否確認は午後7時に終了したそうである。

#### (2) 4年生以上の児童への対応

高学年の児童は地震発生時には校庭に集め学級担任とともに落ち着くのを待った。一段落した後あらかじめ決められていた緊急時の児童引き渡し要領に沿って保護者が迎えに来るのを待った。迎えが来るまで時間はかかったが、児童の安全は確保されていたので対応はうまくいった。

#### (3) 学校再開に向けての対応

児童の安全確保の中で苦慮したのはいつ学校を再開するか、であった。余震が続くさなか、学校を再開するか否かは学校として大きな問題である。親の立場を考えると、登下校ばかりでなく不安材料が沢山あった。その一つが原発の問題である。児童の在校中にメルトダウンでも起きたら学校としてどう対応したらいいのか、たぶん対応は難しいだろう。職員会議で多くの時間を費やしたのはこの問題であった。はっきりとした政府見解が出されていない段階では、学校再開は止めた方がいいという結論に達した。終了式、卒業式など大きな行事が目白押しの中、結論を出すことの難しさは意にあまりある。

児童の安全を考えると交通の再開イコール学校の再開にはならない、という観点立って今後の震災等の対応を考える必要を感じさせられた。

この項は10月8日に日本私学教育研究所で行われた私立小学校経営研究会での話し合いをまとめたものから、転記したものである。